INTERNATIONAL FRIENDSHIP ASSOCIATION OF KISHIWADA 2016.7.15.

にゅーとぴあ岸和田

岸和田市国際親善協会だより

ifa-きしわだ

No.108

熊本地震 救援募金 受付中

無料配布中

岸和田市国際親善協会が作成した防災ハンドブック。無料で協会事務局にて配布しています。ご希望の方は
協会事務局
TEL. 072-457-9694
までお問い合わせ下さい。

「にゅーとぴあ岸和田」は世界の人びと、団体、都市との出会いを求め、ふれあいを大切にした親善・交流を通してお互いの連帯を深め、世界の平和と繁栄、人びとの幸福の増進のための貢献を目的とした、岸和田市国際親善協会の活動記録とメッセージの発行物です。

ご　挨　拶　～2016年度を迎えて～

会長　桐原 喜彦

■岸和田市国際親善協会は、間もなく創立 30 周年を迎えます。創立した1989年（昭和64年）協会のシンボルマークが制定されました。これは前年に開催された「岸和田城400年祭」のシンボルマークをアレンジしたものです。

■「岸和田城400年祭」のシンボルマークは、５年後の関西国際空港の開港を見越して「国際化に向かって未来へ飛び立つ航空機と岸和田城」が図案化され、城とダンジリのまち岸和田市が大きく世界に羽ばたこうという思いが込められています。一年間を通して様々な行事が市内一円で繰り広げられましたが、最たるものは市内全てのダンジリ70数台が府道臨海線の周辺に集まり盛大に曳行された一大イベントでした。この一年間の熱気、国際化に向けての未来の飛躍への思いが翌年設立された親善協会のシンボルマークに引き継がれました。

■時を経て、現在、訪日外国人が急増し、政府はインバウンドの実態に合わせて訪日観光客の目標を2020年の東京オリンピックの年に4千万人、2030年には6千万人に上方修正する議論が交わされています。私たちの日常生活も外国人との身近な触れ合いが普通になってきました。このシンボルマークの意味するところが、制定後約30年を経過して「今！」さらに「これから！」と強く感じます。岸和田市においても異文化理解・共生意識が徐々に進み、外国人をも含む「マゼコゼの共に暮らす社会」が少しづつではあるが進んできたな～と感じています。その一翼を担う私たちの親善協会の役割はこれからさらに大きくなってくるものと考えます。

■昨年度は継続実施している様々な事業に加え、新たに「外国人の一日無料相談」や「外国人市民と地域社会住民の為の防災訓練」等の新しい事業を実施したほか、岸和田東ロータリークラブ様から「地球どんぶり事業」に対して今後5か年間、温かいご寄付を頂いたことで事業に厚みが加わった年度でした。

新年度も各事業が実り多い成果を収めると共に時宜を得た新しい事業にも取り組みながら前進したいと考えます。会員皆さんの積極的なご参加・ご支援を心からお願い申し上げます。

総会報告

今年度の事業指針を決定する「2016年度総会」が4月30日（土）自泉会館において開催されました。

▼第一部　桐原会長の挨拶及びご来賓の祝辞のあと、《事務局》、《広報部会》、《事業部会》、《日本語サロン部会》より、2015年度事業報告、決算・監査報告があり、引き続き2016年度の事業計画案・予算案について、いずれも満場一致で原案通り承認されました。そのあと日本語サロンにおいて永きにわたり支援された功績により、西村令子さんと藤木美恵子さんに感謝状と記念品が贈呈されました。

▼第二部　プリンセスMaya（麻耶あきら）さんスプリング・アフタヌーン・コンサートでは立ち見のでるほどの大勢のファンが詰めかけ、アルベルト田中さんのピアノ伴奏とともに、巧みなトークと素晴らしい歌声に酔いしれました。Mayaさんは岸和田市生まれ。大阪音楽大学卒業後、ウィーン・ボルドー・パリでの修行中多くの世界的な才能たちと触れ合い、帰国後はボーカリストとしてブレイク。クラシックから、ミュージカルナンバー、ジャズ、映画音楽、シャンソンまでジャンルを超えた甘美なその歌声はファンの間で、「アンドロメダボイス」と呼ばれ、「地球にはうたがある、愛がある」をモットーに音楽活動に情熱を注いでおられます。ライブや一流ホテルでのディナーショーのチケットは常に完売。並行して施設や平和コンサートでも活動されています。Vision は「大阪から世界へ！世界平和に貢献すべく、世界各地での、国連での平和コンサートで歌うこと」だそうです。最後は朝ドラの主題歌「365日の紙飛行機」を全員で合唱し、いつまでも余韻の残る素晴らしいコンサートでした。臨時に設けられた熊本地震救援募金には多額のご協力をいただき、誠にありがとうございました。信頼できる募金事業団を通じて被災者のために役立てていただきます。

（広報部会）

5/3
（祝）

第３９回市民フェスティバル

於：中央公園

ゴールデンウィークの真っ只中、心配された天候も時々強い日差しで汗ばむほどの陽気となりました。主催者側の発表では、約４８，０００人の市民が、５１の参加団体のブース、ステージやフィールドで楽しみ、活気にあふれたフェスティバルとなり、「市民の行事としてすっかり定着するようになった」と当協会ブースを訪れた信貴市長さんも大変喜んでおられました。

今年も当協会の目玉はやはり「肉入りチヂミ」です。スタッフの元気な呼び込みと匂いに誘われて、待ちの列が絶えませんでした。１１：４０に３００食完売！　因みに昨年は１３：１５に終了でした。一方初めての「プラバンでアクセサリーづくり」も特に年少の女の子に人気があり、お母さんと一緒に一生懸命にチャレンジ！　用意した６０個組も午前中に材料がなくなり終了となりました。１７名のスタッフの献身的な努

力のたまものです。

午後は突風の影響でテントを早く畳むようにとの主催者側から指示があり、早々にブースを片付けることになりましたが、来年から午後の時間帯をどのように活用すべきか、うれしい課題ができました。　（広報部会）

6/1
（水）

サウスサンフランシスコ市青少年訪問団来岸

岸和田市の姉妹都市、サウスサンフランシスコ市から青少年訪問団の20 名が市民と交流しました。国際親善協会の歓迎交流プログラムは、紀州街道を散策し、だんじり会館から岸和田城へ、そして五風荘の庭園に立ち寄り、岸城神社を参拝し、最後に昼食会という行程でした。

私達、協会会員 5 名が訪問団の皆さんを各所へご案内しました。紀州街道の歴史ある街並みは大変珍しかったようで、興味を示し写真をたくさん撮っていました。続いて、だんじり会館でのマルチスクリーンの映像で、「岸和田だんじり祭」とはどんな祭かを知っていただいたのですが、各町のだんじりが走る様を見て、速さを競っているように見えたようです。法被を着ての大工方体験では、映像で見たようにうちわを上手に振って何度もジャンプしていましたが、実際はだんじりは動いていますよ、と言うと「No way!（むり～!）」とすぐに大屋根から降りてきました。鳴り物体験では、お手本を聞いていたのになんだか自分たち独自の景気の良いリズムを繰り返していましたが、和太鼓や鐘という日本の伝統的な楽器を演奏する文化体験もできたことに皆大喜びでした。

岸城神社にて

岸和田城では、瓦と白壁に石垣という組み合わせが美しいというコメントを引率者の方からいただきました。我がまちのお城をお褒めいただいて、改めて岸和田城を誇りに思える瞬間でした。また天守閣で、海から山まで岸和田市がよく見えるといろいろな質問が出てきました。岸城神社では神

だんじり会館にて

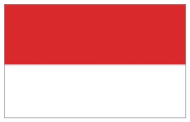
社参拝の作法を実践していただき参拝しました。お昼には境内の施設をお借りし、昼食会で和やかに訪問団の皆さんと交流することができました。

姉妹都市の皆さんと交流するために開かれている協会の語学クラブを続けて来て、その交流が実現できたことに喜びを感じています。伝えたいことをうまく表現できずはがゆい思いもしましたが、外国からの訪問者の皆さんとの交流を通して、日頃の生活では気が付かないことや思いに改めて気付かせてもらえる貴重な機会となりました。ありがとうございました。岸和田とサウスサンフランシスコ、両市民の交流が末永く続いていきますように。　（荻野 昌美）

6/4
（土）

第８回 関西バリ舞踊祭

＊インドネシア共和国バリ州バドン県舞踊団がゲスト出演＊



今年も千亀利の杜に、関西で活動するバリ舞踊家とガムラン奏者が一堂に集い、奏で、舞う関西バリ舞踊祭が ６ 月４日（土）、岸城神社で、在大阪インドネシア共和国総領事館、岸城神社、本国際親善協会の共催のもと開催されました。折悪しくこの日梅雨入り、時折小雨が降る中、盛会のうちに予定されたプログラムを終えることが出来ました。バリと日本の神々のご加護を感じました。

さて、プログラムの半ば、今回一番のサプライズ！来日中のバリ州バドン県からの「スカ・ゴン・ガルギダ・ブダヤ舞踊団」が、本場の楽器演奏と舞踊を披露し、なかでも老人の仮面舞踊（トペントゥア）が独特のユーモアと哀愁で会場全体を包み込みました。

後半部では、各種の舞踊と音楽が披露され、初出の獅子舞（バロン・ケット）の大きな獅子、蜂の求愛ダンス（オレッグ・

タムリリンガン）等にあつい声援が送られました。　恒例となった“ だんじり囃子 ”を演奏された地元五軒屋町青年団の皆様、運営と準備・撤収にご協力をいただいた地元ガールスカウトと府立貝塚高校の生徒の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

（井上 實）

カナダ滞在報告：言語文化的な観点から

服部 圭子（近畿大学准教授・言語文化学博士）

2015 年夏から約半年間、サイモン・フレーザー大学の客員研究員としてカナダのブリティッシュ・コロンビア州に滞在した。多言語・多文化社会カナダの言語政策、グローバリゼーションに伴う言語教育やアイデンティティの問題を研究テーマに、大学院や学部の授業を聴講・参与観察する一方で、学校やボランティア団体を訪問した。学会発表や出張講義の折に旅もした。学生時代ブリティシュ・コロンビア大学に留学した頃からの友人のお蔭で、カナダ人家庭の行事に参加したり、首相選挙に対する現地の人々の意見を聞いたり、散歩に出かけ大自然に親しむ機会にも恵まれた。政府がシリア難民受け入れを表明した折には、それを補完する支援を行う友人援助のためのホームパーティにも参加し、市民の意識の高さも実感した。

サイモン フレーザー大学

街やバスの中では多様な背景の人々がさまざまな言語で話していた。移民受け入れ制度も整備され、英語や就職の支援は専門の団体だけではなく街の図書館等でも行われていた。しかし、カナダにも児童・生徒に対する言語文化維持の課題がある。また、中国人集住地域の看板が中国語に変わり英語圏の住民が疎外される問題や、パンジャブ語話者が多い地域での言語教育が公用語の英語とフランス語で良いのかという課題等も議論されていた。

公立高校日本語授業で書道紹介

さて、カナダで生活する日本人が Japanese、Japanese Canadian、Canadian のどれを名乗るかは自身のアイデンティティによる。現在、戦時中の日本人の歴史を振り返り、街を復興させる活動が行われている。日系カナダ人の中には、日本人であることを隠して成長した辛い過去のため、自身を Canadian だと主張される方もおられる。しかし自分が何者かについて探究し日本文化を学ぶ中で両親の言動を理解し、自身を Japanese Canadian だと捉えるようになったという方の貴重なお話も聞くことができた。

短期間だが「外国人」として他国で生活する中で、あらためて多文化化する日本社会についても考える機会を得た。滞在者の努力に加え、受け入れ側の寛容性やコミュニケーション力・説明力の高さも大切で有難いと感じた次第である。

【編注】

服部圭子先生は当協会・日本語ボランティア養成講座の講師を長年務められています。

第13期日本語ボランティア養成講座＜初級＞開講式

5/26（木）

第13期日本語ボランティア養成講座＜初級＞開講式が5月26日（木）職員会館で開催され、37名の受講者でスタートしました。外国人と日本語学習支援を通じて交流を深める「日本語サロン」で日本語ボランティアとして活動するため、日本語学習支援の基礎知識や技術を学ぶ講座です。合計21回の講座の内70％以上に出席し、さらに5回以上のサロン見学という厳しいカリキュラムを終えた方に初級修了証が与えられ、更に来年度の上級講座へと進んでいただきます。（事務局）

ifa コラム EL MUNDO

エル ムンドとはスペイン語で「世界」を意味します。国際化の時代にあわせ世界のカルチャーファッション、旅行、ライフスタイル等々がどんどん変わりつつあります。その中で皆さんが日常生活で感じたことを題材にとらわれず、自由に投稿していただくという趣旨のコラムです。

《キューバとの合作映画「東のオオカミ」》

世界的に有名なキューバの新星カルロス・M・キンテラ監督（脚本）と河瀬 直美監督（プロデュース）のもとに、奈良県東吉野村を舞台にした合作映画の撮影が始まった。今秋の「なら国際映画祭」の一環で早くも受賞の呼び声が高い作品として注目されている。

計らずも私にスペイン語版のストーリーの概略（A4で約50枚）の翻訳依頼が来たのは昨年4月である。物語の背景はもとより、登場人物の関係も知らされないままでの日本語翻訳版であったので、河瀬監督もさぞかし頭を悩まされたことと思う。しかしその後、推敲を重ねるうちにキンテラ監督の心をほぼ理解できるようになったが、それでも文化の違いから、翻訳し難い箇所や言葉のニュアンスの相違が多々あったのは否めない。

キューバ革命後、船乗りのアキラと現地の女性マルシアの悲哀物語である。約半世紀後、アキラはマルシアのことをずっと忘れられずにいる。絶滅したはずのニホンオオカミを捕えることに執念を燃やす75才の孤独な流れ者の猟師アキラに、マルシアの幻影がつきまとう。因みに脚本はスペイン語→英語→日本語翻訳版で私の所掌ではない。撮影開始直後からも、脚本が再度書き直され、現場は大変混乱したという。双方の間に、いい映画を創る想いを成就させるためのプロセスに大きな溝があることは、河瀬監督も百も承知の筈である。これは日本が直面している国際コミュニケーション力の強化に大いに役立つ布石となるであろう。

言葉や文化の壁から外国人監督の作品への出演を敬遠する日本の俳優は多い。加えて今回は低予算作品である。その中で、老猟師を演じるのは藤 竜也である。この作品に対する意気込みは並々ならぬもので、撮影前からたびたび村を訪れ、一軒家で自炊生活をしながら、共演する猟師たちや地元の人たちと交流を重ねている。

東西冷戦時代の象徴であった米国とキューバとの外交関係は修復された。日本プロ野球界にも強力な助っ人としてキューバ選手がどんどん活躍する日も近いであろう。まずは文化交流面でこの映画の持つ意義は大きい。両監督の既作品と同様に、娯楽性よりも芸術性に重点を置いた作品なので、興業的には大規模映画館での公開は難しく、特定映画館での上映となるであろうが、鑑賞に値する作品であることを確信する。撮影が始まったばかりだが、撮影現場に立ち会えるのを楽しみにしている。（塩屋　裕）

English Open Café

4/16（土） Daniel Vodă さん（モルドバ）＆ Tselmeg Aldarjav さん（モンゴル）

今回の English Open Café のゲストは、関西国際センターで日本語を学習している外交官のダニエルさんと公務員のメグさんです。日本語がとても上手で、フレンドリーな二人からモルドバとモンゴルの歴史、観光、食べ物などについて紹介していただきました。

ダニエルさんはモルドバの伝統的な服（イーヤ）を着て来られました。男性は、この服を結婚式とか特別な時にだけ着ますが、女性は普段もよく着ているそうです。モルドバは東ヨーロッパに位置し公用語はルーマニア語です。ワイン作りの歴史が古く、多数の政治家や著名人が各国からワイナリーを見学に訪れているそうです。日本の安倍さんはまだ来られてないとのことでした。モルドバでは家に入る時、必ず玄関で靴を脱ぐと聞き、とても親近感を覚えました。

メグさんは紹介されるまでモンゴル人とは分からず、てっきり日本人だと思っていました。モンゴルは東アジア北部に位置し公用語はモンゴル語です。首都ウランバートルの近くにモンゴル建国の父と称される初代皇帝チンギス・ハーンの巨大な彫像があります。広大なゴビ砂漠で恐竜の卵の化石が世界で初めて発見されたことでも有名。スポーツはモンゴル相撲、柔道など格闘技が盛んなようです。日本の相撲界ではモンゴル出身の力士の活躍が凄まじいですが、柔道のメダリストも多く出ているようです。（松端 良之）

5/21（土） Bondoc Alexandra さん（ルーマニア）

5月の English Open Café のゲストは、ルーマニア出身のボンドク・アレキサンドラ・アイオナさんでした。彼女は、大阪府立大学大学院に通っています。ルーマニアは黒海の西側に位置する人口約 2000 万人の国。第二次世界大戦後、共産主義の影響を受けつつも、1989 年に民主化を果たし、2007 年には EU 加盟を実現した同国の歴史や文化について、写真を交えながらスピーチしていただきました。

首都ブカレストは「リトル・パリ」と呼ばれ、凱旋門など、フランスの影響を受けた建築物が多くあります。他方、「国民の館（Casa Poporului）」といった共産主義政権時代の建造物もあり、文化と歴史が混在した街並みは、とても個性溢れるものでした。ブカレストから少し足を延ばすと、

世界遺産のドナウデルタやブコヴィナ地方の修道院など、自然と歴史を肌で感じることができます。時代を超えて受け継がれてきた文化も数多く存在し、「ホラ（Hora）」と呼ばれる伝統的なフォークダンスが魅力的でした。他にも、世界初のジェット機を製作したアンリ・マリ・コアンダ、ドラキュラのモデルになったと言われるウラド３世、そして体操選手のナディア・コマネチなど、ルーマニアの著名人は多分野にわたります。

彼女は獣医病理学という難しい研究テーマに携われているそうですが、とても気さくでフレンドリーな人柄でした。和やかな雰囲気で楽しい時間を過ごすことができました。（磯崎 大詩）

5/29（日） 地球村クッキング ～ベルギー編～

今回の講師は、昨年 11 月にも English Open Café のゲストとしてお招きした Bénédicte 前本 Corman さんです。ベネさんの Café の記事は、にゅ～とぴあ 1 月 15 日号（No.106）に掲載されているので、ぜひご覧ください。Café では全編英語でしたが、今回は流暢な日本語を披露していただきました。

料理のメニューは、「ブイヤベース」「チコリのサラダ」「チョコレートムース」の三品でした。ベネさんは高校などの調理実習で何度も経験があるだけに、レシピも指導もとても分かりやすかったです。使用した食材や調味料は全て近くのスーパーでも手に入るものばかり、簡単で且つかなり本格的なベルギーの家庭料理を味わうことができました。チコリは小さい白菜のような野菜で少し苦みがありますが、リンゴの甘みと酢の酸味が絶妙なバランスでとてもおいしくいただきました。ベルギーではサラダ以外によくグラタンにも使うとのことですが、そちらもおいしそうです。今回の料理を早速家で作り、ご家族から大好評を得た参加者もいらっしゃいますので、レシピをご希望の方は事務所までご連絡ください。

今回は定員 30 名を大幅に超えた申し込みがあり、事務局ではうれしい悲鳴があがりました。会員以外の一般の方が 17 名も参加してくださいました。次の企画を楽しみにお待ちください。

BON APPETIT!（おいしく召し上がれ！）ベルギーのおもてなしの心も料理と一緒に教えていただき、お腹はもちろん心も満たされた一日でした。（藤平 敬子）

日本語を教えて

かいづか国際交流協会副会長　澤田 直子

2/21（日）

日本語を教えてみて、改めて日本語や日本文化、日本社会についての発見が多い。それが楽しい。泉北のある教室で、ベトナム人研修生から「悲しさと悲しみはどう違いますか」と言われた。形容詞の語幹に「さ・み・め」を付けると名詞になるが、すべての形容詞に該当するわけではない。教える前にリストアップしておかないと、学習者はない言葉を作ってしまう恐れがある。こんな時に逆引き時点があると便利だ。

《国語辞典逆引き辞典接尾辞の「さ・み・め」に数日費やす》「さ」は、ほぼどの形容詞にもつくが、「め」は主に数値化できるもの（多め・短めなど）に付く。「み」は主に味に関わるもの、感覚や感情に関わるもの（甘み・面白みなど）に付く。また、「深みにはまる・旨みのある仕事」のような比喩的な表現は「～さ・～め」にはない。勉強になった。

日本語についての注文もある。《カタカナ語よくないですといふ指摘　中国人もイギリス人も》中国は外来語を音か意味で訳す。カタカナだと手掛かりがないので困るのだ。英語圏の人にとっては、カタカナ語が本来の発音と異なるし、意味も違うことがあるので分かりにくいと言う。

プロになる訳でもないのに、何年もお稽古事（茶道など）をする意味が分からないと言われたこともある。世界各国のお稽古事事情について知りたくなった。このように、知っているようで案外知らない日本語や日本文化について、これからも発見していきたい。

【編注】

・《　》は短歌です。
・澤田直子先生は、当協会日本語ボランティア養成講座の講師を長年務められています。

世界とつながる英語教育へ

「中学校～大学まで10年あまり英語を勉強しているのに、外国の人とコミュニケーションできない…」というボヤキをよく日本では耳にします。戦後の日本における英語教育の結果です。言語習得の過程を重視せずに、中学校から「読む、書く、聞く、話す」を一気に学習した結果、消化不良を起こし嫌いになっていく日本人がいかに多かったことか…。

平成２３年度より小学校５・６年で「外国語活動」が必修化され、英語教育が正式に導入されました。これまでの初期英語教育の反省から、原則的に文字や文法を最初から学ぶのではなく、子どもたちの外国や外国語に対する興味関心を大切にして、「楽しみながら英語に慣れる」ことを目標に指導しています。そのため歌、チャンツ、ゲーム化したアクティビティを多用し、実際の日常生活の場面を想定した対話表現も多く学んでいます。子どもたちが、楽しみながら活き活きと意欲的に学習している姿に接すると、将来、彼らがグローバルに活躍することを期待します。

ニュージーランド先住民族
マオリとの交流

文部科学省では、この方向性をもう一歩進め、現在の外国語活動を３・４年生で実施し、５・６年では、フォニックスも取り入れることにより読み書きへスムーズに取り組んだり、より実践的な英語によるコミュニケーション力をつけたりすべく教科化を検討中です。大阪府教育庁（旧教育委員会）も「DREAM」という英語のDVD教材を開発し、今年度より導入します。

子どもたちが、英語をツールとして世界の人々と繋がり、平和共存できる世界を創造できるよう私たち大人がしっかり後押ししていきましょう。　（あすなろクラブ 小学校長　岡本 正之）

地球家族

『第九を読む』

「第九」と言えば多くの作曲家を差し置いてベートーベンの代名詞となっている。器楽と声楽が混然と一体化した初めての本格的なシンホニーで古典派音楽の集大成であり、後のロマン派音楽にも大きな影響を与えたクラシック音楽史上燦然と輝く金字塔である。

その初演は異常な形で始まり熱狂で終わる。なんと舞台上に指揮者が二人。一人は作曲者のベートーベン、一人は劇場指揮者ウムウラフ。ベートーベンは自らの指揮に固執するが、既に聴力を失っていた彼の指揮による混乱を恐れた劇場が二人目の指揮者を立てる。彼は、まるで気が狂ったかのように激しくタクトを振るが、演奏者はウムウラフの指揮に従う。順調に演奏が終了すると各席は熱狂に包まれるが、背後の称賛の嵐が聞こえない彼は放心状態で指揮棒を手にしたまま動かない。アルトのソリストが歩み寄り彼の手を取って振り向かせる。彼は演奏の成功を知り子供のように不器用な挨拶を返す。1824 年ウィーンのケルントナートーア劇場での出来事である。彼が 10 年いや 30 年に亘り全身全霊を傾けて作り上げた傑作のデビューの瞬間である。時に 54 歳、死は 3 年後に迫っている。

時は流れ、1918 年に徳島県坂東市（現鳴門市）の俘虜収容所にてドイツ兵捕虜により日本（アジア）で初めて全曲演奏が行われた。劣悪な食住環境と過酷な労働が普通の収容所にあって時の収容所長は彼らを祖国のために堂々と戦った勇士として礼節を尽くし遇した。地元民も四国霊場のお接待の気持ちで「ドイツさん」の愛称で接した。ドイツ兵は畜産やパン製造等の産業技術指導により地元に貢献する一方、芸術やスポーツを指導し共に働き共に遊んだ。

やがて第一次世界大戦が終わり収容所の閉鎖に伴いドイツ兵が帰国することとなり多くの市民が別れを惜しみ、収容所で死亡した若者の霊を慰めるため慰霊碑を立てる。太平洋戦争終了後、朝鮮に先祖代々の墓を残し帰国した女性（高橋春枝さん）が異国の地で死を迎えた若者の心情は他人事とは思えず、この慰霊碑の墓守をかってでる。これがドイツでも評判となりドイツ功労勲章が与えられる。鳴門市はドイツ館を建設しドイツのリューネブルグ市と姉妹都市となり、その後「第九」を通じて交流が続く。

日本人による初演は九州大学オーケストラによる第九メロディーでの「昭和天皇ご成婚奉祝歌」とされる。戦時中、東京芸大では出陣学徒壮行会や繰り上げ卒業式で演奏され、無事帰還した若者が戦陣に散った仲間の音楽学徒へのレクイエムとして歌った。そして今では、年末ともなれば全国各地で恒例の風物詩として第九が響く。

東京オリンピックでは東西両ドイツチームの国歌代わりに使われ、長野オリンピック開会式でも演奏される。ベルリンの壁崩壊時には米英仏ソの混成オーケストラが演奏し、両ドイツ統一祝典前夜祭でも歌われる。このように第九は時代と国境を越えて親善, 友好、平和等の場面でしばしば登場する。

「運命への忍従は許されない、お前の幸福は芸術のみに存在する、神よ、自己に打ち勝つ力を与え給え」と聴覚を失い遺書を書くほどの苦悩から不屈の意思で立ち上がり、やがて歓喜に至る。シラーの「歓喜に寄せて」の言葉「生きとし生くる人はみな友ぞ」「抱かん、諸人よ心寄せて」を高らかに歌い上げ感動的に第 4 楽章を閉じる。ナポレオンもヒットラーも武力で世界を征服出来なかったがベートーベンは不滅の人間愛で世界を制覇した。第九こそは多様な地球家族を束ね、地球家族が住む地球国の国歌である。

（奥野 藤樹）

岸和田に暮らして…

かつては外国の街、岸和田も、住めば都となり今は自分が暮らす我が街岸和田。そんな国際色豊かな ifa-きしわだの心強いサポーターでもある皆さんに、自分史や岸和田での暮らしについてお話いただいています。

Living in 岸和田 KISHIWADA 第18回

第18回は中国・ハルピン市出身の丁 立浄さんです。
現在は貿易業務の傍ら外国人への日本語指導者としても活躍され、来日13年目です。

丁　立浄さん

丁 立浄さん

丁さんは中国最北東部の黒竜江省の省都ハルピン市の出身です。

同省はアムール川を挟んでロシアと国境を接し、そして地勢的歴史的関係もありロシアや日本の影響も残る国際都市工業都市で冬は極寒ですが、夏は晴れた爽やかな日が続きます。日本との直行便も運航されています。

教育にも熱心で小学生の頃からロシア語、英語、日本語のいずれかを学ぶ。彼女はかねてより日本に関心があり日本語を選択し 2003 年に日本語を更に学ぶため来日の上、羽衣国際大学を卒業し当協会日本語サロンで日本語を勉強する傍ら民間会社で輸出入関係の仕事をして度々海外出張もこなしてきました。特筆すべきは日本語指導者養成講座を修了し今では二つの日本語サロンでブラジルとベトナムの方の日本語支援に当たっています。英語も堪能で現在、MBA資格取得のため神戸大学入学を目指して英語のブラシアップ中です。

日常生活ではファッションやクッキングに関心があり社交ダンスが最大の趣味ですが日本料理も得意で茶碗蒸し、蕎麦が大好物とのこと。岸和田の人は暖かく親切で周辺の方と人間関係を築きコミュニケーションを良くすることにより学ぶ点、教えられる点が多く、これがあったればこそ今の自分があると感慨深げに語る。

日本と中国は千年以上の交流実績があり日本は中国から多くの文化文明を得てきた。今や世界の経済大国の 2 位と 3 位で両国の友好関係なくして世界平和は

あり得ないと言っても過言ではない。かつて両国の間で不幸な歴史がありましたが彼女の日本での活躍や自らのキャリアアップに取り組む真摯な姿は結果として細やかであるかもしれませんが日中友好の懸け橋となるものとチャーミングな丁さんをインタビューして感じました。

（取材　奥野 藤樹）

ハルピン市の冬（右）と夏の様子（左）

Information

■「外国人のためのだんじり インフォメーションセンター」スタッフ募集

〔と　き〕9月17日（土）～18日（日）
区分 9:45 ～ 13:00・13:00 ～ 16:00

＊終日お手伝いいただける方には昼食を用意します

■English Open Café の開催

9 月以外の毎月第 3 土曜日の 13:30 ～
マドカホール3F視聴覚室で開催しています。
申込みなしでどなたでも参加できます。進行は全て英語です。

にゅーとぴあ岸和田 No.108 編集担当
緒方理世・奥野藤樹・栗尾宣子・塩屋　裕・藤平敬子・三森すみ代
お問い合わせや感想などは事務局まで　TEL&FAX (072)457-9694

岸和田市国際親善協会　2016年7月15日発行　事務局　〒596-0004 岸和田市荒木町1丁目17番1号 マドカホール内 TEL072-457-9694
E-mail：kokusai@mk.city.kishiwada.osaka.jp　URL：http://ifa-kishiwada.rinku.org